

美術専攻学生の創作活動における悩みについての心理学的検討

史林凡（東京大学大学院教育学研究科）

A psychological study of art majors' difficulties in their creative activities

Linfan Shi

Author's Note

Linfan Shi is a PhD Student, Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Abstract

How do art students experience creative activities during college education? What kind of difficulties do they face when creating artworks and how do they cope with them? Answers to these questions offer insightful suggestions to support art students' creative activities and improve the art course curriculum. This study investigates the difficulties experienced by art major undergraduates during their creative activities and how they manage them.

Studies of the art creation process reveal that there are multiple stages of creation (e.g., Botella, et al., 2011; 2018; Yokochi & Okada, 2007). While such studies indicate that there are failures and interruptions in creation, the kinds of difficulties experienced and how they are addressed have not been adequately examined. Noted the obstacles artists encounter in creative progress, but only with techniques, materials, and tools. Though Botella et al. (2011; 2018) observed art students go through during creation, their study overlooked students' obstacles and improvements during the process.

In order to examine the obstacles faced by art school students, this study interviewed 32 art major undergraduates about their artworks and their personal interpretation of the works to identify the difficulties they encountered during the creative process. The results of the analysis showed that art students had a number of problems in terms of uncertainty about their creative criteria and self-evaluation of their work. It was suggested that the occurrence of these difficulties is an important indicator for forming one's own creative criteria in the process of expertise.

Keywords: art major, creation, difficulties, interview

キーワード：美術専攻，創作，悩み，インタビュー

美術専攻学生の創作活動における悩みについての心理学的検討

1 問題と目的

芸術作品を作ることに関しては、長きに渡り、「芸術は縁遠いもの」だと敬遠されたり、「神に与えられた力による産物」などと神格化されて捉えられてきた。それとともに、芸術創作を行うアーティストに関しても、「天賦の才を持つ者」と容易に片づけられ、その実像は正視されてこなかった (Abbing, 2007)。しかし近年では、芸術創造領域に注目を寄せた創造性研究・熟達化研究によって、芸術作品の創作プロセスが明らかにされ、アーティストの輪郭も徐々に見えるようになってきている。

これまでの創造性領域の熟達化研究においては、プロのアーティストを対象にした熟達者研究が先行研究の多くを占めている (例えば, Wallas, 1926; Mace & Ward, 2002; Yokochi & Okada, 2005)。熟達化研究では、一般的に、ある特定の活動を始めてから、その領域の熟達者になるまで、約 10 年程の実践を経験しなくてはならないという「10 年ルール」が存在することが指摘されている (Ericsson et al., 1993)。創造性領域の熟達化研究では、この「10 年ルール」を裏付けるような形で、「創作ビジョン (creative vision)」というものが提案されている。創作ビジョンとは、長期的な創作活動を総括する中核的な創作意図であり、創作活動開始から創作ビジョンが形成されるまで、約 13 年程かかることが指摘された (横地・岡田, 2007)。この創作ビジョンが形成されるまで、創作者は、「外的基準へのとらわれ」、「内的基準の形成」、「調和のとれた創作活動」の三つの段階を経て熟達していくことが示され、第三段階にて創作ビジョンが明確化され、確信を持った創作活動が可能に

なる傾向があると示唆された (横地・岡田, 2007)。Yokochi & Okada (2021) は、さらに創作者の作品の変化の傾向について調査した。その結果、創作活動の熟達者は、自らの創作ビジョンに基づき、作品のコンセプトを変化させていた。それに対し、若手の創作者は、飛躍的に作品を変化させ、体系的な変化の傾向は見られなかった。

これらの研究では、熟達者を研究対象にすることで、創造的活動のアイデア生成の過程の解明や創作過程の段階モデルの提案などがなされてきた。しかし、熟達者になる前までの過程については十分に検討されていない。美術専攻の学生を対象にした研究はいくつか行われているが (例えば, Botella et al., 2011; 2018; Sawyer, 2018)、これらの研究では、学生を「創作活動の経験者」と括り調査しているため、熟達化の観点から、熟達初期段階特有の創作の特徴に焦点を当てた分析は十分に行われていない。しかしながら、学生を代表とする若手創作者は、これから創造活動の熟達者へと発展していく大事な段階にいる者たちであり、この段階の特徴や問題への解明は、その後の熟達段階の移行の教育的・心理的支援に重要な示唆を与えると考える。

よって本研究では、創造性活動の熟達化初期段階にいる美術系大学・専攻の大学生 (以下、美大生) を対象にし、彼らが大学在学中に創作活動を通してどのような問題に直面し、どのような悩みを経験しているのかについて探索的に検討する。

2 方法

調査対象者 東京都内の芸術系大学美術系学科

に所属する学部四年生 21 名（女性 18 名，男性 3 名， $M=23.38$ 歳； $SD=1.24$ ； $range=22-26$ 歳）と一年生 11 名（女性 8 名，男性 2 名，無回答 1 名， $M=19$ 歳； $SD=0.95$ ； $range=18-21$ 歳）を機縁法により集めた。

調査手続き 調査は 2022 年 2 月～9 月に実施し，2023 年 5 月～7 月に四年生群 5 人を追加した。調査対象者の基本情報を事前に伺い，オンラインで半構造化面接を実施した。調査対象者に，これまで手掛けた作品のポートフォリオを紹介してもらいながら，在学期間中の創作活動に関する経験について質問した。なお本調査は，東京大学倫理審査専門委員会へ倫理審査申請を行い，東京大学大学院教育学研究科長の承認を受けて実施した（審査番号：22-109）。

分析方法 以上の調査対象者から得られたインタビューデータで次のような分析を行った。まずは，インタビュー内容を書き起こし，逐語録を作成した。ただし，インタビューの中で本研究の本題から逸れた発話，または想像上の発話，個人が特定できると思われる発話を除外した。次に，協力者の逐語録から，創作活動にまつわる悩みや困難に関する発言を抽出し，それに基づいて悩みに関するカテゴリーを生成した。

生成されたカテゴリーに基づき，逐語録のコーディングを行った。コーディングは，逐語録においてカテゴリー項目に関連する発話が一回でもあれば“1”としてカウントし，発話の頻度は集計しないこととした。これは，人によって発話量や頻度が異なるため，その影響を抑えるためである。割合は，小カテゴリー毎に各学年の全データ数で割った値を示している。

3 結果と考察

まず，インタビューデータの逐語録のうち，

とくに悩み・困難に関する発話からカテゴリーを生成した。

悩みカテゴリーは，最も大きなレベルが 3 つあり，「1. 個人の活動面」，「2. 社会的環境面」，「3. 作品面」となった。「1. 個人の活動面」は，調査対象者が創作活動を行う過程で発生する問題およびそれに対する悩みを反映したものであり，その下位概念に，「アイデア生成の困難さ」，「技術不足による制約」，「創作基準の不確定」，「モチベーションの低下」，「アイデンティティの不確定」があった。「2. 社会的環境面」は，個人が創作する際に，社会的環境との関わりによって発生する悩みを反映したカテゴリーとなる。その下位概念には，「社会的比較による圧力」，「環境への馴染みにくさ」，「業界への不信任感」，「将来への不安」があった。「3. 作品面」は，創作の成果物を自己評価する際に発生した省察や悩み，もしくは，他者からの評価によって発生した悩みを反映したカテゴリーとなる。その下位概念には，「作品への自己評価による悩み」と「作品への他者評価による悩み」があった。

以下では，結果の詳細を 3 つの大カテゴリーに沿って論述し考察する。その際，下位の小カテゴリーについて逐語録の発言例を用いながら，悩みの具体的な内容について説明する。なお，発話例は，そのカテゴリーに該当した発話のうち代表的なものをいくつか記載するが，元の発話のうち，省略した部分のある場合はそのことを明記した。

3.1 個人の活動面

まず，「1. 個人の活動面」の五つの下位概念を順番に説明する。「アイデア生成の困難さ」は，「作品のアイデアが浮かばない，なにを作れ

ばいいかわからない」というような、制作に取り組む前の段階に発生する悩みである。集計の結果、一年生は5人(45.5%)、四年生は10人(47.6%)が言及しており、どの学年も約半数の学生が悩んでいることが窺える。

「技術不足による制約」は、「作りたいものはあるけどそれを表現する技術が足りない」、「もともとの制作方法を変えたいけど手癖がなかなか抜けない」というような、作品を制作する際に技術面の制約によっておこる悩みである。集計の結果、一年生は3人(27.3%)、四年生は11人(52.4%)となり、四年生の方がやや多い傾向が窺える。

「創作基準の不確定」は、「自分なりの一貫したテーマや作風が見つけられていない」、「自分らしい表現をするためにどうしたらいいかわからない」というような悩みである。一年生は4人(36.4%)、四年生は15人(71.4%)となり、やはり四年生の方が多い傾向にある。

「モチベーションの低下」は、「作品を作る気力がない、やる気が出ない」というような悩みである。「モチベーションの低下」については、一年生は3人(27.3%)、四年生は4人(19.0%)となり、学年間に大きな差はないようである。

「アイデンティティの不確定」は、「自分の作家としての理念は何か」、「自分はなぜ制作をするのか」というような自身の作家としての適性に対する省察や疑いに関する悩みである。アイデンティティについては、一年生は3人(27.3%)、四年生は5人(23.8%)となり、モチベーションの悩みと同様に学年間に差はないようである。

この大カテゴリーは、個人が創作活動をする過程で発生する悩みを反映した。特に、「創作基準の不確定」では四年生と一年生の発話数に

差があり、代表的な発話例は以下になる。

「自分の絵柄がなかなか見つからないなというか、まあそういうのはありましたね。なんかずっと続けているものがなかったので、同じモチーフを使って描き続けている人とか、憧れはありましたね (S7)」

Yokochi & Okada (2021) は、若手アーティストは、新しい作品において、作品のテーマ・モチーフ、制作方法、コンセプトなどを大幅に変更しているのに対し、熟達したアーティストは、長期的な創作活動を総括する中核的な創作意図である創作ビジョン(横地・岡田, 2007)に基づき、作品のアイデアを生み出していることを指摘している。つまり、創作基準の形成は、創作における熟達度をあらわす重要な事柄となると考える。

3.2 社会的環境面

次に、「2. 社会的環境面」の下位概念の集計結果について説明する。「社会的比較による圧力」は、周りとは比べることによって感じる劣等感やプレッシャーに関する悩みであり、一年生は3人(27.3%)、四年生は12人(57.1%)の発話がカウントされ、四年生の方がやや多めにその悩みを経験している。

「環境への馴染みにくさ」は、「美大の雰囲気や周りの人の言動に違和感を覚えて環境に馴染めない」、もしくは、「馴染みすぎることに抵抗を感じる」といったような悩みであり、美大入学後間もなくして感じる悩みである。集計の結果、一年生は3人(27.3%)、四年生は2人(9.5%)の発話がカウントされた。

「業界への不信感」は、「学外の美術を取りまく環境に身を置くことに抵抗がある」、「美術業界で必要とされていることと自分が貫きたい考

えとの間に差がある」といった悩みである。「業界への不信任」については、一年生からの回答はなく、四年生は7人(33.3%)の発話がカウントされた。

「将来への不安」は、「どういう進路選択をしたらいいかわからない」、「作家として活動していけるか不安」といった悩みである。集計の結果、一年生は3人(27.3%)、四年生は6人(28.6%)となった。

この大カテゴリーは、個人が創作活動を行う中で、外部の環境から受ける影響により発生する悩みを反映した。特徴的な結果として、「業界への不信任」に関する悩みは四年生の発言にのみ見られたことが挙げられる。特に、大学在学中、学外での展示や公募での作品発表を経験している者が発言していた。学外での作品発表を経験することは、大学という教育機関の外側の大きなアート業界の環境を知る機会になる。その中で、想像していた業界環境との違いを感じ、不快な思いを体験することにもなる。そのため、そのような業界環境の中で創作活動を継続することと自分が貫き通したい信念との間に乖離を感じることで、業界に対しての不信任を覚えることになると考えられる。以下の発話例は、創作経験を積む中で垣間見た業界の実態と自分の中で貫き通したい信念との差を感じた際の葛藤を語っている。

「私はその雰囲気がちよっと苦手というか、美術は好きなんですけど、そのアートマーケットのなんていうのか、(中略)作家としてやってくには、やっぱり堅実に考えなきゃいけない部分もあるとは思いつつも、それで受けを狙ったりとかはしたくないというか、(中略)だけど、やっぱりそういう成功してる人とかを見ると、私もそういうことをしなきゃいけないのかなあとか、

そういうことをしてこそ作家なのかなとか…(S11)」

このように、大学4年間の創作経験を積み上げる間でも、身近な他者から、美術業界という大きな環境まで、社会的環境の様々な要因が個人に影響し、創作の悩みが発生することが、このカテゴリーの結果から示された。

3.3 作品面

最後に、「3. 作品面」の下位概念の集計結果について説明する。「作品への自己評価による悩み」は、「完成したものが作品として成立しているかどうか判断がつかない」、「伝えたいことがきちんと伝わっているか自信が持てない」というような、完成した作品に対して自己省察する際に起こる悩みである。自己評価については、一年生は4人(36.4%)、四年生は18人(85.7%)となり、四年生の八割以上がこの悩みを抱いていたのに対し、一年生はまだ四割弱しかこの悩みを抱いていないことが分かる。

「作品への他者評価による悩み」は、「他の人の意見をどこまで自分の作品に取り入れるべきかわからない」、「なぜそのような評価になるのかわからない」という悩みであり、作品制作中や作品発表後、他者からのフィードバックを得る際に、他者と自己の作品に対する評価の食い違いを感じ発生する。集計の結果、一年生は2人(18.2%)、四年生は11人(52.4%)であり、四年生は約半数の人がこの悩みを抱くのに対し、一年生は少ないようである。

この大カテゴリーでは、完成した作品への評価から発生する悩みを反映した。下位概念のどちらも、四年生の方がより作品の評価について悩んでいた。とくに、作品への自己評価から発生する悩みは顕著な結果を示しており、代表的

な発話例は以下である。

「自分のコンセプトや興味関心が本当に美術作品として、一人で部屋で作って自己満足をする作品ではなく、ちゃんと公の場に公開する価値があるのかっていうことは、今でも悩んでますね。(中略) 美術作品としてのクオリティとしては、そこまで正直満足してません。まず自分の中で言いたいコンセプトがはっきりしてないんで、鑑賞者に対しても、自分の中ではっきりしていないのに伝わらないですよ…(S15)」

作品への自己評価は、作品を作ったり見たりするときの評価基準の形成過程と関わる可能性が示唆される。横地・岡田(2007)では、美術家の創造的熟達過程の初期から中期の段階において、「外的基準へのとらわれ」を経て「内的基準の形成」がなされる可能性を指摘している。外的基準へのとらわれとは、既存の価値観や表現方法、現在のアートシーンで注目されている作品表現を意識したり、それを取り入れたりして制作を行う傾向を意味する。また、内的基準の形成とは、自分の創作におけるテーマを模索したり、自己の表現を探究したりする中で、自らの創作に対する判断基準を作っていくことと考えられている(横地・岡田, 2007; 2012; 横地, 2020)。横地・岡田の先行研究では、主に30代以上の美術家の回顧的インタビューから創造的熟達過程における制作基準の変化を見出しているが、同様の過程が学生時代から生じていることを示す結果といえる。特に四年生の方が一年生よりも作品への自己評価に関する悩みを抱きやすいことから、創作活動経験を積む中で基準形成の問題が意識化されるのではないかと考えられる。

3.4 創作基準に関する更なる分析と考察

以上の集計結果から分かるように、個人が創作を行う際に、「創作基準の不確定」に関する悩みが四年生では多く発生し、一年生との差も大きかった。熟達初期段階の創作基準の形成は、後々、熟達者にとって創作の根幹となる創作ビジョンの形成に影響すると考えられる。そのため、悩みカテゴリーの集計結果から、創作基準について更なる分析を行った。

発話データに基づき、創作基準を形成することへの態度を3タイプに分け、学年別に集計を行った。その結果、1) 一貫した創作基準を追求したいと明確に言及した群(四年生15人, 71.4%; 一年生2人, 18.2%), 2) 一貫した創作基準を求めないと明確に言及した群(四年生3人, 14.3%; 一年生1人, 9.1%), 3) それらの発言がなかった群(四年生3人, 14.3%; 一年生8人, 72.7%)となった。

1) 一貫した創作基準を追求したいと明確に言及した群には、インタビューの時点で、ごく少数ながらも、明確な創作基準をすでに持って制作している人と、自分なりの創作基準を形成したく、それを意識して模索しながら活動している人の二つが含まれている。集計結果から分かるように、四年生の七割は明確に創作基準を形成したいと発言しており、「創作基準の不確定」という悩みの集計結果とも一致する。

タイプ1)と2)は創作基準を形成するか否かについて意識化されているのに対してタイプ3)は意識化されていない可能性がある。一年生の7割以上は創作基準についての発言が見られなかったことに対し、四年生のほとんどは創作基準の形成についてなにかしらの考えを持ち、意識的に創作活動に取り組んでいる。このことから、自らの創作基準を形成することに関

しての意識は、創作活動の熟達化を反映していることが示唆される。また、全体的に四年生が創作活動に対して抱える悩みが多かったことから、悩みが起ること、制作過程や作品に対しての反省が生まれ、問題解決のための試行錯誤が行われている可能性が示唆された。

4 総合考察

本研究では、創作活動の熟達化初期段階の悩みに関する分析を通して、この段階に発生する問題やこの段階固有の特徴について検討した。その結果、自らの創作基準を形成することに関しての悩みや、創り上げられた作品の良し悪しに関する自己評価から発生する悩みが美大生には顕著に出ており、そのような悩みが発生することにより、自身の創作活動の問題が意識化され、その問題解決の過程で熟達する可能性が示唆された。

熟達化の初期段階にいる美大生は、創作活動において、自身の作品の評価、他者からの評価に対する省察、社会的比較などをする際に、外部の基準にとらわれやすい傾向を持っている。この結果は、横地・岡田 (2007) が指摘したアーティストの熟達化段階の第一段階である「外的基準へのとらわれ」の特徴と一致しており、この「外的基準へのとらわれ」が、美大生の持つ創作活動に関する悩みに影響を及ぼすものだと考えられる。しかし、四年生になると、自己の判断基準を形成する意識が高まっていく可能性があることを、本研究は示唆した。このことから、創作基準に対しての意識化とその形成に向けての模索を行うことは、創作の熟達程度を推測する重要な指標の一つであると考えられる。今後の展望として、創作基準の形成過程において、どのような試行錯誤が行われたのかについ

ての詳細を明らかにする研究が必要であると思われる。

参考文献

- Abbing, H. (2007). 金と芸術——なぜアーティストは貧乏なのか?. 山本和弘 訳. grambooks.
- Botella, M., Zenasni, F., & Lubart, T. (2011). A dynamic and ecological approach to the artistic creative process of arts students: An empirical contribution. *Empirical studies of the arts*, 29 (1), 17-38.
- Botella, M., Zenasni, F., & Lubart, T. (2018). What are the stages of the creative process? What visual art students are saying. *Frontiers in Psychology*, 9, 2266.
- Ericsson, K. A., Krampe, R. T., & Tesch-Römer, C. (1993). The role of deliberate practice in the acquisition of expert performance. *Psychological review*, 100(3), 363-406.
- Mace, M.-A., & Ward, T. (2002). Modeling the creative process: A grounded theory analysis of creativity in the domain of art making. *Creativity research journal*, 14(2), 179-192.
- Sawyer, R. K. (2018). How artists create: An empirical study of MFA painting students. *The Journal of Creative Behavior*, 52(2), 127-141.
- Wallas, G. (1926). *The art of thought*. Harcourt Brace Jovanovich.
- Yokochi, S., & Okada, T. (2005). Creative cognitive process of art making: A field study of a traditional Chinese ink painter. *Creativity Research Journal*, 17(2-3), 241-255.
- 横地早和子・岡田猛 (2007). 現代芸術家の創造的熟達の過程. *認知科学*, 14(3), 437-

454.

横地早和子・岡田猛 (2012). 芸術家. 金井壽宏・楠見孝 (編) 実践知——エキスパートの知性 (pp. 267-292). 有斐閣.

横地早和子 (2020). 創造するエキスパートたち——アーティストと創作ビジョン. 共立出版.

Yokochi, S., & Okada, T. (2021). The process of art-making and creative expertise: An analysis of artists' process modification. *The Journal of Creative Behavior*, 55(2), 532-545.